

シンポジウム

中間地帯(ノーマンズランド)を生きる女たち

河内 恵子

1・はじめに

ラドクリフ・ホール (Radclyffe Hall) が 1928 年に発表した『孤独の泉』(The Well of Loneliness) は女性間の同性愛を描いている猥褻図書として、出版社と販売書店が訴えられ、多くの作家やジャーナリストを巻き込んだ論戦が展開された。1928 年 7 月 27 日に出版されたこの小説をめぐる裁判は同年の 11 月 16 日には、1857 年に発令された猥褻文書禁止法に基づいて発禁処分となった。しかし、この事情はイギリス国内に限られていた。つまり、アメリカでは裁判は行われたものの出版に問題なしという結論が出され、フランスでは如何なる禁止もなく出版されていた。入手可能なスキャンダルな作品は、結局は、多くの読者を得たのだ。

1949 年にこの作品を出したイギリスの出版社は当局から如何なる注意も受けなかった。発禁処分という罰則は、もはや効力を有していなかったのだ。猥褻図書というラベルを貼られた『孤独の泉』は、20 世紀をとおして「女性間の同性愛」という観点から主に研究されてきた。

ラドクリフ・ホールと生活を共にしていたウーナ・トラウブリッジ (Una Troubridge) が伝えるところによると、ホールは専門的な知識をもたない一般の読者に向けて sexual invert についての本を書きたいと、語っていた。作品中にハヴェロック・エリス (Havelock Ellis) の意見 “true inversion is natural, therefore normal, because it is biologically determined” やクラフト-エビング (Richard von Krafft-Ebing) の ‘true invert’ の女性は生殖器以外は男性的な肉体のなかに男性的な性質を所有しているという考えを披瀝して

いる。前者が‘effeminate man’や‘masculine woman’という‘third sex’の存在を信じているのに対して後者は同性愛を病理的なものと理解し、異常だと判断する。そして、‘true invert’である女性は生殖器以外は男性なので、‘womanly woman’を求めるのだ。この‘womanly woman’は説得されて同性愛者になっているのであって、‘masculine woman’に惹かれる以外は完全な女性ということになる。‘feminine lesbian’は、とどのつまり、矛盾した存在であり、‘born invert’によって誘惑されることによるのみ存在しうる。それゆえにデカダントな存在ということになるのだ。

作家自身がこれらの研究者の意見をもとに、同性愛についてさまざまに考察する主人公のステイーヴン・ゴードンを創りあげた。当然のことながら、ステイーヴンの言動は、レズビアニズム研究における、重要な資料となってきた。しかし、20世紀の後半から第一次世界大戦文学に関する研究が活気みせるようになると、この小説を戦争という背景のなかで、自らのsexualityを問いかける女性たちを描写している作品と捉える傾向が、徐々にではあるが、みられるようになった。『孤独の泉』を戦争小説として読んでみたい。

2・戦争小説としての『孤独の泉』

母と娘：

結婚10年目に待望の子供を授かった裕福な貴族、フィリップの息子が生まれると信じて胎児をステイーヴンと名付けていた。クリスマスイヴに誕生したのは女子であったけれども生前から決められていたように、原始キリスト教会最初の殉教者聖ステパノ(Saint Stephen)にちなんでステイーヴンと名付けられ父親に汚蔑されて育つ。だが、母親のアンナは自らの女性性から離れていく娘に違和感をおぼえるようになる。

This likeness to her husband would strike her (Anna) as an outrage—as though the poor, innocent seven-year-old Stephen were in some way a caricature of Sir Philip; a blemished, unworthy, maimed reproduction—yet she knew that the child was handsome. (*The Well of Loneliness* 11)

華奢でやわらかい美しさをもつ母親は、体格がよく、端正ではあるけれど (handsome)、いわゆる女の子らしさが欠如したひとり娘を素直に受け入れることができない。深く愛する夫のフィリップ **身印** 似ているが故に、男の魅力を発揮する娘に夫の「カリカチュア」、「複製品」を母親は見てしまう。自分自身にきわめて似ている娘を跡継ぎの息子のように愛する父親。父親の母親に対する深い優しさを真似て、父のように母親を守ろうと決意する娘。この親子関係は奇妙な三角関係を形成している。

また、アンナが新しいもの、知らないものを自分には関係のない退化したものとして処理し、そういったものに対して、強い嫌悪感を抱く性質であることが紹介されている。女の子らしくないスティーヴンへの距離感はこのような存在を生んでしまった自分への失望感と重なる。娘を理解することができないだけではなく、「新しいもの、知らないもの」を生んでしまった自分を理解することができないアンナは漠然とした不安感にとらわれている。

娘の invert としての側面を理解していたフィリップ **身印** 事故死した後、スティーヴンは広大な土地や家屋敷を管理経営し、母親を守り、というように父親の役割をつとめるのだが、その力量や立ち振る舞いがフィリップ **身印** に似てくればくるほど、アンナの心は病む。息子のような娘との距離がますます広がっていく。このような時に、スティーヴンがある女性に激しい恋心を抱いていることが発覚し、アンナは娘を激しく拒絶する。

All your life I've felt very strangely towards you. I've felt a kind of physical repulsion, a desire not to touch or to be touched by you—a terrible thing for a mother to feel—it has often made me deeply unhappy. I've often felt that I was being unjust, unnatural—but now I know that my instinct was right ; it is you who are unnatural—your face is living insult to his(Sir Philip's)memory—I would rather see you dead at my feet than standing before me with this thing upon you—this unspeakable outrage that you call love in that letter.(ibid.203)

娘が同性愛者であることが確認した今、アンナは罪悪感や焦燥感から解放され、あたかも勝者のようにスティーヴンに故郷を去ることを命じる。美

しい田園地帯にある屋敷モートンはイギリスの豊かさを象徴するかのよう なカントリーハウスだが、この地を去ることは、スティーヴンに家族、故郷といったスティーヴンをスティーヴンたらしめてきたものとの別離を意味する。

娘が同性愛者であることがわかり、漠然としていた不安は「理解できないもの、新しいもの、退化したもの」への憎悪と化するのだが、根本的な問題はしこりとなって残ったままだ。何故、このような存在を生んでしまったのか、という問いに答えは与えられていない。

もうひとりの母： 父親という絶対的な理解者の思い出と自らの過去に濃密に結びつく故郷

モートンを去ったスティーヴンは、同性愛者としての自らの存在の奇怪さ (grotesqueness) と未開人のような原始性 (primitiveness) を強く認識し、母親が嫌悪した「退化した存在」としての自分を悲しむ。このスティーヴンを救い、導くのは、もうひとりの母パドルである。教育係として共に暮らしてきた彼女もまた ‘invert’ としての秘密の生を生きてきたのだ。スティーヴンとともにモートンを去ったパドルは、豊かな表現力を持った彼女に「表現力を持たない、弱い同性愛者たちのためにも」作家になることをすすめる。

For the sake of all the others who are like you, but less strong and less gifted perhaps—it’s up to you to have the courage to make good , and I’m here to help you to do it, Stephen.(ibid. 208)

そしてまた、第一次世界大戦が勃発した時には、イギリスのために戦うことによって自らの存在の有用性を証明するようにと伝えるのだ。

‘invert’ の母親に導かれ、スティーヴンは作家として自立し、また、第一次世界大戦が勃発した際には最前線で負傷した兵士を病院へと運搬する救急車部隊の一員として大活躍することになる。男でもあれば女でもある／男でもなければ女でもない、エリスが言っていた「第三の性」をスティーヴンは生きるのだ。死が日常としてある戦場で生き生きと活躍

できる場所を発見したのだ。しかし、戦争という場が消失したとき、結局は同性愛者たちが咎められることが少ないパリで、「弱い invert」たちの中心的存在として生きる道しか残っていない。貧困や病気や社会の無理解に苦しみながら生きる、脆弱な同性愛者たちを見守る母親の役割を担う スティーヴンは自らの肉体が、その子宮が、何も生み出さない no-man's-land(ノーマンズランド)そのものであることを認識する。

1926年に発表された短篇「オギルヴィ嬢の居場所」(“Miss Ogilvy Finds Herself”)においても、第一次世界大戦中の激戦地を走る救急車部隊の一員として活躍したオギルヴィ嬢が戦後その生を輝かせる場所を失う悲劇が描かれていた。戦争が勃発したときすでに 55 歳であったが、自らの同性愛を隠して静かに残りの人生を生きるというそれまでの考えを棄て、戦争という場で「第三の性」として彼女はほんとうの自分を生きたのだ。戦後、旅先で、逞しい肉体をもつ primitive な青年へと姿を変え、華奢で従順な feminine な女を恋人として抱いた夢をみたとき、オギルヴィ嬢は自らの性の充足を経験して死んでいく。ここでは、「未開人の原始性」が神話という世界を表現する手段として用いられているが、神話の世界の若者はオギルヴィ嬢の死によってのみ出現できるのだ。スティーヴンには神話的終焉はまだ訪れない。

3・『西部戦線異状あり』戦争の継子たち』

母と娘、再び:

エヴァドニ・プライス (Evadne Price) がヘレン・ゼナ・スミス (Helen Zenna Smith) というペンネームで 1930 年に出版した『西部戦線異状あり』は『孤独の泉』を強く意識して書かれた作品だ。第一次世界大戦中の激戦地で活躍した女性隊員だけで構成された救急車部隊が描かれているのだが、この設定は、R. ホールの二作品と同じだ。

「イギリスのあっぱれな娘たち」とイギリス本国でもてはやされている部隊は Tosh, The B.F., Etta Potato, Skinny, The Bug, Helen Smith(物語の語り手)、の 6 人で構成されており、リーダーのトッシュは伯爵の姪で、平和時には、社交界の動向を伝える新聞にその写真が掲載される有名人だ。

大柄な身体は人びとに安心感を与えるし、彼女自身の表現だが、「下水溝のような心と巨人の勇気」を持ち、「スミスフィールド[もと家畜の市場があったロンドンのシティ北西方向の一地区]の肉屋の言葉」を使い、寒風にさらされて赤くなった丸顔は酪農婦のそれのようだった。確かに、洗練された言動のステイーヴンとは重ならない部分もあるが、激戦地という空間に限って言うならば、際立つ運転技術、勇気と思いやり、リーダーシップ、育ちの良さ、と両者には重なる部分が多い。しかし、トッシュには同性愛的な面はみられず、同性愛者として告発され、追放されるのは、身体も精神力も弱いスキニーだ。そればかりか、語り手をはじめとして多くの女性隊員たちの憧れの対象であったトッシュは小説の半ばで戦死してしまう。Gay Wachmanはステイーヴンに繋がる人物を作品から消し去り、スター性をまったくもたないスキニーを追放される同性愛者として描いている点から、この作品に描き込まれている *lesbophobic* を読み取っている。この小説が同性愛を深く掘り下げた作品ではないことは確かで、自らの性のありかたに悩む女性たちの姿が前面に出されているわけではない。しかし、この作品には『孤独の泉』において劇的に描かれていた母と娘の対立が、別のアスペクトから取り上げられていて興味深い。

I (Helen Smith) became savage at the futility. A war to end war, my mother writes. Never. In twenty years it will repeat itself. And twenty years after that. Again and again, as long as we breed women like my mother and Mrs. Evans-Mawnington. And we are breeding them. (*Not So Quiet...Step-daughters of War* 90)

戦地に子供を送ることによって、愛国心を満足させ、無上の喜びとプライドを感じるホーム・フロントの母親たちと過酷なバトル・フロントで精神と肉体の限界まで働く「あっぱれなイギリスの娘たち」との確執が執拗に描写される。ヘレンの母親の敵はドイツという敵国ではない。自分と同じように子供を戦地に送り込むことに熱心なエヴァンズ＝モーニングトン夫人だ。ヘレンが歎くようにこのような母親たちが存在するかぎり戦争は繰り返されるのだ。

戦争が、とりわけ、ホーム・フロントにおいて、出征した男たちに代わって働く女性たちのあいだの社会階級差を縮小したというのは事実だが、バトル・フロントで新たな階級差別をつくりだしていたのも事実である。同性愛者に対する差別もその一例だが、ヘレンの妹のトリックスが自らの経験として語るように、救急看護隊 (VAD: Voluntary Aid Detachment) の中では資格と経験を持つ看護師とボランティアとのあいだの待遇の差は歴然としていたし、救急車部隊に属する女性運転手たちに、自動車運転の技術を有しているということから明らかかなように中・上流階級の子女が多かったのに対し、陸軍婦人補助部隊 (W.A.A.C: Women's Army Auxiliary Corps) の家政部門には貧しい労働者階級出身の者が多かった。戦争は女性たちのあいだに新たな階級差と差別をつくり出していた。

厳しい勤務体制と過酷な現場に疲れ果てたヘレンが精神を病んでロンドンの自宅に帰ると、一刻も早く戦場へ戻ることを強いる母と戦わなければならなかった。強く、遅く、生命力に溢れたトッシュの死、どの兵士が父親なのかわからない子供を妊娠した妹トリックスの戦死、陸軍婦人補助部隊の家政部門で働き出した際に知り合った貧しい階級出身の同僚たちの死。夥しい死のなかで生き残ってしまったヘレンは敵軍と自分自身がいる場所とのあいだに広がる no-man's-land を見たとき、居場所を失った自分を意識する。彼女の姿は自らの肉体の内に不毛の no-man's-land を抱え込んだステューヴンのそれと重なる。

第一次世界大戦を経験したふたりの作家は、戦争を描写しながら、母と娘の対立を切り取ってみせた。生んだものを破壊しようとする母親の無理解という残酷さと対峙したとき、娘たちにはどのような選択肢が残されているのだろうか？母となることを拒絶することで、母から娘へという連鎖を断ち切るのもひとつの選択だろう。作家たちは問い続けている。

参考文献

- Acton, Carol. *Grief in Wartime: Private Pain, Public Discourse*. Basingstoke: Palgrave-Macmillan, 2007.
- Cline, Sally. *Radclyffe Hall: A Woman Called John*. London: John Murray, 1997.
- Dellamora, Richard. *Radclyffe Hall: A Life in the Writing*. Pennsylvania: Pennsylvania

- UP, 2011.
- Fussell, Paul. *The Great War and Modern Memory*. 1975. Oxford: Oxford UP, 2000.
- Hall, Lesley A. *Sex, Gender and Social Change in Britain since 1880*. Basingstoke: Palgrave-Macmillan, 2013.
- Hall, Radclyffe. "Miss Ogilvy Finds Herself" 1926. *Women, Men and the Great War: An Anthology of Stories*. Ed. Trudi Tate. Manchester: Manchester UP, 1995.
- . *The Well of Loneliness*. 1928. London: Virago, 2004.
- Hynes, Samuel. *A War Imagined: The First World War and English Culture*. 1990. London: Pimlico, 1992.
- Ouditt, Sharon. *Fighting Forces and Writing Women*. London: Routledge, 1994.
- . *Women Writers of the First World War: An Annotated Bibliography*. London: Routledge, 2000.
- Raitt, Suzanne and Trudi Tate eds., *Women's Fiction and the Great War*. Oxford: Oxford UP, 1997.
- Sherry, Vincent. *The Great War and the Language of Modernism*. Oxford: Oxford UP, 2003.
- . ed. *The Cambridge Companion of the First World War*. Cambridge: Cambridge UP, 2005.
- Smith, Helen Zenna. *Not So Quiet...Step-daughters of War*. 1930. New York: Feminist, 1989.
- Souhami, Diana. *The Trials of Radclyffe Hall*. London: Virago, 1999.
- Stevenson, Randall. *Literature and the Great War 1914-1918*. Oxford: Oxford UP, 2013.
- Troubridge, Una. *The Life and Death of Radclyffe Hall*. London: Hammond, 1961.
- Tylee, Clair M. *The Great War and Women's Consciousness*. London: Macmillan, 1990.
- Wachman, Gay. *Lesbian Empire*. New Brunswick: Rutgers UP, 2001.
- 河内恵子編著 『西部戦線異状あり: 第一次世界大戦とイギリス女性作家たち』
慶應義塾大学出版会、2011年。
- 林田敏子 『戦う女, 戦えない女: 第一次世界大戦期のジェンダーとセクシュアリティ』人文書院、2013年。